

パウロの喜び (4)

2008. 02. 12 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

詩篇 119篇105節

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

テモテへの手紙・第二 3章15節

また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。

今兄弟が読まれた箇所は、聖書が人間に与えられている目的をはっきりさせるものではないかと思います。既に三千年前、ダビデは、「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です」と語っています。みことばがなければ、私はどうしたらいいかわからないと、ダビデが経験した結果から告白したのです。

では、私たちは何のために生きているのでしょうか。死後にはいったい何があるのでしょうか。これらは、私たちがぜひ知らなくてはならない大切なことです。このような人生の根本問題の解答は、全て聖書の中にあります。聖書は、主なる神によって人類に与えられた唯一の真理の書なのです。

例えば、この集会が出している本は、本当の意味において大したものではありません。中に引用されている聖書の「みことば」だけが価値あるものであり、他は全部人間の書いたものですから、真理かと疑問視した方がいいと思います。「聖書が何と言っているか」、それだけが大切なのです。確かにある人々は自分の意見を通すために、聖書の中のみことばを引用します。しかし人間の考えていることが大切ではなく、「聖書は何と言っているか」ということだけなのです。

ですから、パウロは愛弟子であるテモテに書いたのです。もう一度読みましょう。

テモテへの手紙・第二 3章15節後半

聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。

聖書の中心は、「神の福音」です。それは、滅びゆく人間を救うためになされた主なる神の「愛による救いの道」です。私たち人間は、神とともに生きるように造られたのですが、その創造主なる神から離れて罪を犯した結果、主なる神から刑罰を受ける者となってしまいました。

しかし神は、罪を必ず罰する「義なるお方」であると同時に、わがままな人間を深くあわれまれる「愛なるお方」でもあるので、「ご自身の御子による救い」を成し遂げてくださったのです。それが、イエス様の十字架上の死です。いろいろな教えがありますが、その中心が御子イエス様の流された十字架上の血潮でなければ、単なる道徳に過ぎません。罪人である人間には、守り得ないのです。

イエス様を「自分の救い主」として受け入れる者には、神はその人の罪を赦し、神の子どもとして「永遠のいのち」を与えてくださるのです。その贖いのみわざを教えるために聖書が与えられているのです。

しかし、「救われる」ということは確かに一番大切ですが、それだけでは十分ではありません。子どもが生まれたなら、それで「完了」とはなりません。成長を見守る仕事があり、成長すれば更に大変です。この経験は、母親たちは良くわかるでしょう。生まれた時は本当に嬉しかったと。けれど、やがてこの子どもが悩みの種になり、眠れなくなってしまふ…。どうしたらいいのでしょうか…。と。

多くの人々を導いたパウロは、このことを経験したのです。つまり私たちは、福音を宣べ伝えれば、もうそれで十分なのです。強制する必要はありません。人間にはその先何もできないのです。本来ならば福音を宣べ伝えて、イエス様を紹介し、早く手を引いた方がいいのですが…。しかし、救われた人々が成長しなければ困ります。

ですから、パウロはいろいろな手紙を書いたのです。この手紙を読むと、パウロは気の毒な男でした。悩んだ男でした。そして涙を流したのです。どうしてかと言いますと、せっかく救われた人々がまだ解放されていなかったからです。主のためというより、自分のために生きていました。しかしテサロニケの兄弟姉妹は、パウロにとって喜びそのものでした。

ですから今日は、このテサロニケ第一の手紙について、続いて考えたいと思います。

今まで学んだのは1章からでした。1章を読むと、テサロニケの兄弟姉妹は最初から素晴らしい出発をしたことがわかります。彼らは、十字架につけられ、死んでよみがえられたイエス様の福音を聞いた時、大喜びでそれを受け入れました。自分が欲しかったのは、また必要だったのは、「これだ！」と彼らはわかりました。もう一度1章5節、6節を読みましょう。

テサロニケ人への手紙・第一 1章5節、6節

なぜなら、私たちの福音があなたがたに伝えられたのは、ことばだけによったのではなく、力と聖霊と強い確信とによったからです。また、私たちがあなたがたのところで、あなたがたのために、どのようにふるまったかは、あなたがたが知っています。あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちと主とにならう者になりました。

福音とは、一つの教えではありません。福音は「イエス様ご自身」です。

彼らはみことばが「わかった」、「理解した」のではなく、みことばを受け入れたのです。受け入れることによって、その力を経験するようになりました。

8節

主のことばが、あなたがたのところから出てマケドニヤとアカヤに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰はあらゆる所に伝わっているので、私たちは何も言わなくてよいほどです。

そしてテサロニケの人たちは、みことばを単に頭で理解したのではなく、霊の糧として食べてしまったのです。つまり、受け入れました。みことばを本当に自分のものとして受け入れ、十分に味わった時にのみ、イエス様の大きい力が働きます。これが1章の内容です。

2章によると、パウロと同労者たちの働きが本当に真実なものであったので、むなしく終わらなかったことがわかります。テサロニケの集会は、マケドニヤとアカヤとにいる信者たち全体の模範となり、光となったと記されています。そのような素晴らしい出発をただけにとどまることなく、兄弟姉妹たちはそれから先の成長もおろそかにしてはいませんでした。

罪人がイエス様を救い主として受け入れ、新しく生まれ変わるということは、この世において最も素晴らしい出来事に違いありませんが、「神の子」とされた者が、やがて妥協し悪魔の罠に落ち込んでしまうとしたなら、それは本当に大きな悲しみになってしまいます。もちろん、生まれることと出発がなければ、成長があり得ないことは明らかです。

多くの方は、自分がイエス様を信じる者であると言いますが、「正しい出発」がなければ正しい成長もあり得ません。しばしば、そのことがないがしろにされています。正しい出発がなされないと元の状態にとどまってしまうか、悪い場合に後戻りさえしてしまうのです。更に注意しなければならないことは、仮に「正しい出発」がなされたとしても、それが必ずしも正しい成長を意味するとは限らないということです。

確かにテサロニケの兄弟姉妹は、新しく生まれただけではなく、成長したのです。テサロニケの兄弟姉妹の場合は、どうだったでしょう。その答えは、3章の中に与えられています。

七つの質問について、一緒に考えてみたいと思います。

第一番目。第3章には何という表題をつけることがふさわしいか。

第二番目。信仰ということばはいったいどこに出てくるか。

第三番目。信仰とはいったい何なのか。

第四番目。どのような危険が信じる者の信仰生活を脅かすのか。

第五番目。パウロは、どのようにして信じる者のために信仰の危険を警告したのか。

第六番目。パウロは、テサロニケの兄弟姉妹についてどのような情報を得たのか。

第七番目。信じる者のためにパウロは何を望んでいたのか。

*第一番目。第3章には何という表題をつけることがふさわしいのでしょうか。

例えば『良き信仰』。或いは『信仰によって』。または『それにもかかわらず』。或いは『吟味』。或いは『苦しみを通しての祝福』などをつけることができるのではないかと思います。

第3章は、次のように三つに分けて考えることができます。

1. 1節と2節です。「奉仕における共働」と言えます。

テサロニケ人への手紙・第一 3章1節、2節

そこで、私たちはもはやがまんでできなくなり、私たちだけがアテネにとどまることにして、私たちの兄弟であり、キリストの福音において神の同労者であるテモテを遣わしたのです。それは、あなたがたの信仰についてあなたがたを強め励まし、

2. 「奉仕における苦難と患難」についての箇所は、3節から8節までです。

3節

このような苦難の中にあっても、動揺する者がひとりもないようにするためでした。あなたがた自身が知っているとおりに、私たちはこのような苦難に会うように定められているのです。

信じる者は苦難に会うように定められているのです。ある教会では、「イエス様を信じれば問題ない。病気も治るし…」と。癒しを強調する伝道は魅力的ですが、それは嘘です。

4節から8節

あなたがたのところをいたとき、私たちは苦難に会うようになる、と前もって言うておいたのですが、それが、ご承知のとおり、はたして事実となったのです。そういうわけで、私も、あれ以上はがまんができず、また誘惑者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦がむだになるようなことがあってはいけないと思って、あなたがたの信仰を知るために、彼を遣わしたのです。ところが、今テモテがあなたがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせをもたらしてくれました。また、あなたがたが、いつも私たちのことを親切に考えていて、私たちがあなたがたに会いたいと思うように、あなたがたも、しきりに私たちに会いたがっていることを、知らせてくれました。このようなわけで、兄弟たち。私たちはあらゆる苦しみと患難のうちにも、あなたがたのことでは、その信仰によって、慰めを受けました。あなたがたが主にあって堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。

「良い知らせ」とは、よいニュースです。

3. 「奉仕における交わりの喜び」についての箇所です。9節から。

テサロニケ人への手紙・第一 3章9節から13節

私たちの神の御前にあって、あなたがたのことで喜んでいる私たちのこのすべての喜びのために、神にどんな感謝をささげたらよいでしょう。私たちは、あなたがたの顔を見たい、信仰の不足を補いたいと、昼も夜も熱心に祈っています。どうか、私たちの父なる神であり、また私たちの主イエスである方ご自身が、私たちの道を開いて、あなたがたのところに行かせてくださいますように。また、私たちがあなたがたを愛しているように、あなたがたの互いの間の愛を、またすべての人に対する愛を増させ、満ちあふれさせてくださいますように。また、あなたがたの心を強め、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒とともに再び来られるとき、私たちの父なる神の御前で、聖く、責められるところのない者としてくださいますように。

*第二番目。第3章の中で数多く出てくることばは、「信仰」ということばです。信仰ということばは、いったいどこに出てくるのでしょうか。今読んだ箇所の中にあつたでしょう。

テサロニケ人への手紙・第一 3章2節

私たちの兄弟であり、キリストの福音において神の同労者であるテモテを遣わしたのです。それは、あなたがたの信仰についてあなたがたを強め励まし、…

5節

そういうわけで、私も、あれ以上はがまんができず、また誘惑者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦がむだになるようなことがあつてはいけないと思って、あなたがたの信仰を知るために、彼を遣わしたのです。

6節、7節

ところが、今テモテがあなたがたの所から私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせをもたらしてくれました。また、あなたがたが、いつも私たちのことを親切に考えていて、私たちがあなたがたに会いたいと思うように、あなたがたも、しきりに私たちに会いたがっていることを、知らせてくれました。このようなわけで、兄弟たち。私たちはあらゆる苦しみと患難のうちにも、あなたがたのことでは、その信仰によって、慰めを受けました。

10節

私たちは、あなたがたの顔を見たい、信仰の不足を補いたいと、昼も夜も熱心に祈っています。

イエス様を信じるということは、イエス様と結びついていることを意味しています。「信じます。信じます」と言いながらイエス様と結びついていなければ、本物ではありません。

パウロが望んでいたことは、テサロニケの兄弟姉妹がイエス様と結びついていること、これこそパウロの願いであり、また祈りでした。パウロはテモテからこの事実を聞いた時、大いに慰められたのです。

この3章によって、パウロがどのようにして兄弟姉妹たちをイエス様の御手の中にお渡ししたかを、はっきりと見る事ができるのです。更に主の御手にある兄弟姉妹が、主の導きによって成長していることもわかります。

*第三番目。そもそも信仰とはいったい何でしょうか。

皆さんはおそらく、ヘブル書の11章1節を思い出すのではないかと思います。

ヘブル人への手紙 11章1節

信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。

と記しています。

このみことばによると、信仰とは二つの面を持っているのではないのでしょうか。即ち、

1. 目に見えないものを見ることであり、
2. 勝利を確信することです。

したがって、信仰の代わりに、確信とか信頼とか希望、或いは望みということばを用いてもよいのです。そして、実際にはまずイエス様と出会い、イエス様に信頼し、自分自身をイエス様に明け渡すことを意味しているのです。

まことの信仰の内容は、「主イエス様」が十字架につけられ、よみがえられ、再び来られるということです。信仰とは、イエス様との交わり、或いは結びつきに他なりません。信じる者は、見えませんがイエス様を愛し、やがて来られるイエス様を待ち望んでいるのです。有名なペテロ第一の手紙1章8節をもう一度読みます。

ペテロの手紙・第一 1章8節

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。

彼らはいへん悩んだ人々でした。迫害され、憎まれた人々でした。けれど周囲の状況とは全く関係なく、彼らはひたすらイエス様を愛し、更に栄えに満ちた喜びにおどった人々でした。

ですから初代教会の人々は、非常に魅力的でした。どんなに迫害されても、無視されても、彼らは喜んでいて人々だったのです。結果として、毎日人々は悔い改めて信者の群れに加えられるようになったのです。

テサロニケの兄弟姉妹に対してパウロが抱いていた最大の関心事は、彼らがこの信仰を堅く守り続けるということでした。即ち、彼らは目には見えないけれども必ず来られる主イエス様を見上げ続け、どんなことが起こってもイエス様との生き生きとした交わりを持ち続けるということでした。そこでパウロは、テサロニケの兄弟姉妹の信仰が堅く立っているかどうかを知りたいと切に望んでいたのです。

テサロニケ人への手紙・第一 3章5節

そういうわけで、私も、あれ以上はがまんができません、また誘惑者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦がむだになるようなことがあってはいけないと思って、あなたがたの信仰を知るために、彼を遣わしたのです。

パウロは、テサロニケの兄弟姉妹はもう絶対大丈夫というような確信を持つことをせず、どうなっているか絶えず心を配り、配慮していたのです。けれども、パウロの信仰はそれらの不安や心配を克服しました。というのも、パウロが見ていたものは彼らの弱さや問題などではなく、主の真実さと恵みだったからです。彼らはいろいろなことで悩むようになり敗北者になったとしても、「主は勝利者だ」とパウロは確信したのです。パウロは大いなる愛をもって彼らのために心を配ったため、アテネとコリントでテモテと一緒に働くことを断念し、テモテをテサロニケへと送ったのです。

*第四番目。どのような危険が信者の信仰生活を脅かすのでしょうか。

いろいろなことが、イエス様との交わりの妨げの原因となりました。

テサロニケ人への手紙・第一 3章3節

このような苦難の中にあっても、動揺する者がひとりもないようにするためでした。あなたがた自身が知っているとおりに、私たちはこのような苦難に会うように定められているのです。

このような苦難の中にあって、動揺する者がひとりもないように励ますため、パウロは同労者であるテモテを遣わしたのです。イエス様を絶えず見上げていないと、イエス様を見失ってしまう危険性が大いにあるのです。そして、イエス様を見失うと、信仰は弱くなります。いろいろな患難を通してそのような状態に陥ることはまれではなく、その結果、イエス様にしっかりと結びつくことができなくなってしまうのです。

テサロニケ人への手紙・第一 3章5節

そういうわけで、私も、あれ以上はがまんができません、また誘惑者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦がむだになるようなことがあってはいけないと思って、あなたがたの信仰を知るために、彼を遣わしたのです。

パウロは、もしや「試みる者」がテサロニケにいる兄弟姉妹を試みはしないかと気遣っ

たのです。患難を通してイエス様を見失ってしまうと、「試みる者」が入って来て、私たちの信仰の土台を崩してしまうのです。また、イエス様を絶えず見上げていないと、私たちは悪魔の手玉に取られてしまうのです。

パウロが心からテサロニケの信者のために心を配っていたことは、次の節を通して知ることができます。

テサロニケ人への手紙・第一 3章1節

そこで、私たちはもはやがまんできなくなり、私たちだけがアテネにとどまることにして、

5節

そういうわけで、私も、あれ以上はがまんができず、また誘惑者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦がむだになるようなことがあってはいけないと思って、あなたがたの信仰を知るために、彼を遣わしたのです。

二度も、「私はもうがまんできなくなった」とパウロは告白しています。テサロニケの兄弟姉妹が脅かされるとパウロと同労者も同じように信仰が脅かされ、また彼らがイエス様にあって堅く立つならパウロたちも生きることになるからです。

8節

あなたがたが主にあって堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。

と記されています。したがって集会に聖霊が自由に働けなくなることは、パウロにとって死を意味するに等しいことでした。けれど、彼らが主にあって堅く立っていることを聞いたとき、パウロも生き生きとした状態にあることができたのです。他の兄弟姉妹が苦しんでいるとき、私たちも同じように苦しみを感じているのでしょうか。

創世記の4章の中に、ひどいことが書いてあります。アダムとエバの子どもである長男カインは主に向かって、「私は、弟の番人でしょうか」と言ったのです。こんにちでも、多くの人がこのカインと同じ態度をとっているのではないのでしょうか。この態度はまさに殺人犯の態度です。兄弟姉妹の誰かが罪を犯した時、それは自分には関係がないという態度をとるならば、それこそまさにカインと同じような態度に他なりません。

パウロはテサロニケの集会としっかり結びついて一つになっており、もはや離れることはできない状態になっていました。そのために、彼らが主イエス様にあって堅く立っている時は、パウロの信仰も喜びで生き生きとしており、彼らの信仰が揺れ動いて動揺している時は、パウロも同じように痛みを感じました。

*第五番目。パウロは、どのようにして信者たちのために信仰の危険を警告したのでしょうか。

テサロニケ人への手紙・第一 3章4節

あなたがたのところにいるとき、私たちは苦難に会うようになる、と前もって言っておいたのですが、それが、ご承知のとおり、はたして事実となったのです。

やがて患難に会うことをあらかじめ預言しておいたことがわかります。パウロは、イエス様に従うことが十字架を背負うことを意味し、必ずいろいろな患難や苦しみに遭遇するはずである、と言っておりました。けれど、ただ単に警告しただけでなく、なぜ患難に会わなければならないかについても、語っているのです。

その第一の理由は、信じる者がこの世にあってはいわば異分子のようなものであり、寄留者また旅人であるため、「思い」はこの世ではなく「天国」にあるので、妥協しなければ必ず患難が伴うことになる、ということです。

第二の理由は、患難によってのみ私たちの信仰は聖められ、強められるということです。例えば、金は1000℃の熱で鍛えられます。そして信仰は、聖書の中で金に例えられています。ペテロ第一の手紙を読んでみましょう。

ペテロの手紙・第一 1章7節

信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

患難がなければ私たちの信仰は鍛えられず、したがって成長しません。ですからパウロは、「患難をも喜んで」と告白するようになりました。パウロは兄弟姉妹の信仰を強め励ましました。

テサロニケ人への手紙・第一 3章2節

私たちの兄弟であり、キリストの福音において神の同労者であるテモテを遣わしたのです。それは、あなたがたの信仰についてあなたがたを強め励まし、

10節

私たちは、あなたがたの顔を見たい、信仰の不足を補いたいと、昼も夜も熱心に祈っています。

また、パウロは彼らの信仰の足りないところを補いたいと願っていました。パウロは決して気休めの言葉や事実と反するようないい加減なことを言わず、信仰が成長するためにどうしても多くの患難が必要である、と言ったのです。

パウロの心からの願いは、信じる者の信仰が強められ、成長することでした。パウロの生活の特徴は、自分自身を忘れ、信者の幸せを願うということでした。私たちの場合は、

どうでしょうか。兄弟姉妹に対してどのような態度をとっているのでしょうか。

*第六番目。パウロは、このテサロニケの兄弟姉妹についてどのような情報を得たのでしょうか。

テサロニケ人への手紙・第一 3章6節

ところが、今テモテがあなたがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせをもたらしてくれました。また、あなたがたが、いつも私たちのことを親切に考えていて、私たちがあなたがたに会いたいと思うように、あなたがたも、しきりに私たちに会いたがっていることを、知らせてくれました。

この節を読むと、テモテが本当に良い知らせを持って来たことがわかります。テモテはテサロニケの兄弟姉妹の信仰と愛について知らせました。テモテは、テサロニケの兄弟姉妹が信仰によって主イエス様としっかり結びついていることを自分の目で確かめたのです。彼らは決して宗教団体を形成していたのではなく、主イエス様との生き生きとした交わりを持っていたのです。そして自発的な交わりが形成されたことこそ、主イエス様への「愛」に他ならなかったのです。

テサロニケ人への手紙・第一 3章8節

あなたがたが主にあって堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。

テサロニケの兄弟姉妹が主にあって堅く立っていたのです。けれどこんにち多くの信者は堅く立っておらず、いつも動揺しています。しかし堅く立つことは、決して自分の力によるのではなく、主にあって初めて実現されるのです。したがって、主にあって堅く立つということは、自分自身の虚しい努力をやめて、すべてをイエス様に委ね明け渡すことによるのです。

パウロは、彼らの状態をつぶさに聞いて、そのために大喜びで感謝しました。しかし、パウロはそれで満足したとかそれで結構であるとか言うことはせず、さらに高い目標を見上げてそれを目指したのです。確かに、新しいいのちを得るためには多くの闘いが必要とされますが、信じる者となってからの信仰の成長のためになされる闘いのほうがはるかに大きく、また激しいものです。パウロは、信者に対してどのような目標を望んでいるかということ、祈りの中で表わしているのです。

*第七番目。信者のためにパウロは何を望んでいたのでしょうか。答えは10節です。

テサロニケ人への手紙・第一 3章10節

私たちは、あなたがたの顔を見たい、信仰の不足を補いたいと、昼も夜も熱心に祈っています。

「昼も夜も、熱心に心から祈っている」パウロと同労者たちです。テサロニケの兄弟姉妹の信仰を完全なものとするために、彼らの信仰の足りないところを補うということこそ、パウロの願ったことでした。そのために、愛を増し加えて豊かにしてくださるように、主に祈ったのです。自分で頑張っても何もなりません。祈るなら主は奇跡をなすお方である、と彼らは確信しました。

テサロニケ人への手紙・第一 3章12節

また、私たちがあなたがたを愛しているように、あなたがたの互いの間の愛を、またすべての人に対する愛を増させ、満ちあふれさせてくださいますように。

またそれと同時に、主イエス様が彼らの心を強め、聖く責められるところのないものにしてくださるやうにと祈ったのです。そしてパウロはそのために日夜しきりに願い求め、祈り続けたのです。実際パウロが信者のためにどのようにして、どれほど配慮したかについては、全く想像することができません。即ち、パウロは自分自身の苦しみ、自分自身の問題などを忘れて、兄弟姉妹のために日夜真剣に祈ったのです。

主イエス様は、このようなパウロの態度と祈りの答えとして、テサロニケの兄弟姉妹を豊かに祝福してくださいました。

こんにち必要とされていることは、パウロと同じように、自分のことだけでなく、他の兄弟姉妹に対しても真剣に祈り、力を注ぐことではないでしょうか。主はそのような者を通りよき管として用い、他の信者をも祝福することを望んでおいでになるのです。その意味で、私たちはすべてを主によって自由に用いていただくではありませんか。

最後にもう一度、13節を読んで終わります。

テサロニケ人への手紙・第一 3章13節

また、あなたがたの心を強め、私たちの主イエス様がご自分のすべての聖徒とともに再び来られるとき、私たちの父なる神の御前で、聖く、責められるところのない者としてくださいますように。

了